

校内別室による安心できる居場所で関係づくりについて

不登校児童の状況

対象児童は、小学校1年生の途中までは登校していたが、その後、5年生の現在に至るまで不登校状態が続いている。保護者は、不登校に関しては心配しておらず、普段はフリースクールに通っていて、週1日は学校で過ごせたらと考えている。

具体的な取組

○登校のきっかけづくり

来室当初は、誰にも会わないように過ごしたいとの当該児童の希望があり、学級の児童と顔を合わせることも難しい様子だったが、支援員からの「4年ぶりに給食を食べてみよう」という提案がきっかけとなり、校内別室に給食を運んでくれる在籍学級の日直の児童にお礼を言うなどの触れ合いが生まれている。その後、他の来室児童や教員、スクールカウンセラーとの関わりも増え、コミュニケーションへの抵抗が少しずつ減ってきている。

○安心できる教室環境

校内別室内でも、他者の視線を気にして落ち着かない様子が見られるときには、パーティションを利用して個人スペースを設けている。安心して個人学習に取り組めるよう、児童の状況に応じて教室環境を変えることができるようにしている。



○寄り添う

学校でどんなことをして過ごしたいのか、どんなことに興味があるのかを、当該児童の気持ちに寄り添って聞き取ったり、こちらからもできそうなことを提案したりしながら、少しずつ目的意識をもって過ごせるように支援している。

○興味関心を共有して関係をつくる

夏休みに訪れた場所や、家でよく聞いている講談など、児童が興味関心のあることをタブレット端末で調べ、支援員と共有することで、関係づくりを行った。好きなことに夢中で取り組むことで、たくさんの笑顔が見られた。

成果

週1日登校するリズムをつくることのできた。また、少しずつコミュニケーションが広がってきた。さらに、次に登校したときに「○○をしたい！」など、次回の見通しをもって登校や活動ができるようになってきた。

課題

別室が小さく、状況の異なる複数の児童に対して、同時に対応する場合の難しさがある。また、児童一人一人によりできること苦手なことが異なるため、別室利用のルールを定めることが課題である。

校内別室の取組について

不登校児童の状況

対象児童は、小学校5年生までは、登校に対する不安が強く、登校するまでに時間がかかった。登校時に腹痛などの身体症状が出るため、遅刻して登校していた。

具体的な取組

○教室環境の整備

- ・校舎の南端の教室
- ・直接入室も可能
- ・静かな場所
- ・カーテンで外から見えない
- ・パーティション
- ・人との接点が少ない



○一日の流れ

- ・別室へ登校
- ・支援員と予定表の作成
- ・担任とも確認
- ・教室での授業参加
- ・別室での自習
- ・オンライン学習の視聴
- ・給食は教室、別室から選択



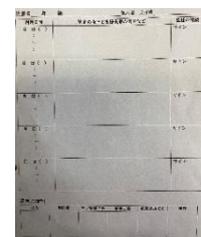
○友達との交流

- ・休み時間は、校内別室を活用する児童と共に楽しく活動する様子がある。
- ・上学年として別室利用の下学年の児童に優しく接する様子が見られる。



○教員、支援員との連携

- ・利用日時、児童の様子等が分かる活動日誌を支援員が作成し、担任と情報共有する。
- ・一週間の活動日誌を管理職、生活指導主任、学年主任、教育支援コーディネーター、養護教諭が確認し、組織的に把握・支援している。



成果

不登校生徒の安定した登校日数の増加、別室利用生徒の笑顔の増加、支援員による担任の負担軽減、保健室との役割分担により、不登校が減少した。

課題

別室でのルールの明文化により、利用児童に応じた支援、長期児童への働きかけ、教員の意識改革などが必要である。

校内別室に登校できる日を増やす

不登校児童の状況

対象児童は、小学校5年生であり、小学校2年生の頃から、学校になじめずにいた。通院等の疲労による欠席が多く、月1日程度の登校が続いた。特別支援学級を勧めたが、保護者による通常の学級で過ごさせたいという思いを尊重している。

具体的な取組

○私の時間割を作成

- ・学級担任と共に当該児童が校内別室で過ごすための時間割を作成することにより見通しをもつことができるよう促した。また、当該児童のペースで学習できるように無理のない課題を設定した。
- ・A Iドリルに取り組むことで何年生の学習が定着していないかを調べ、その学年に遡り、学習定着に合った課題に取り組むよう支援した。



○支援員と教員による2人体制

- ・支援員だけでなく、その時間に授業の入っていない教員が1人ずつ交代で校内別室の見守りに入り、声をかけながら学習や過ごし方を支援した。
- ・何かあれば学級担任に連絡して相談したり、教室まで付き添ったりした。

○安心できる環境づくり

- ・個室と少人数で使用できる机を設置した自習室を用意し、集中しやすい場所を自分で選んで学習できるようにした。少し休憩したいときに利用するリラクゼーションエリアも整備している。



○情報の共有

- ・職員の打合せで、小まめに児童の情報を共有した。声のかけ方や過ごし方のルールを共有するなどし、児童への接し方の統一を図りながら、児童が安心して過ごすことができる環境づくりを行った。

成果

登校日数が昨年度に比べ大幅に増えた。保護者にも、中学校進学に向けて今後どうすべきかを考えたいと前向きな変化が見えている。

課題

- ・他の利用児童との関わりや、課題への取組で「できた」の経験を積み、自己肯定感を高められるようにしていく。保護者に別室での様子を伝えつつ、今後の方針を相談していく。

気持ちを落ち着かせて、自立できる1年生を目指す

不登校児童の状況

対象児童は、小学校1年生の児童であり、学級で落ち着くことができず、集中して学習できなくなった。毎朝泣きながら、保護者と登校し、保護者と一緒に校内別室に来て過ごすようになった。

具体的な取組

○オンラインによる授業

オンラインで教室とつなぎ、校内別室から授業に参加し、学習ができるよう支援した。

○一人一人に合わせた学習支援

・好きな教科への授業参加から始めた。始めは、支援員と一緒に教室に入り、隣でサポートしていたが、慣れてきたら徐々に1人で参加するよう促し自信を付けていった。

○学級担任と支援員の連携

- ・学校に安心していただけるように、校内別室でできる活動を学級担任や当該児童、保護者と相談しながら模索した。
- ・教室と同じ内容の課題を校内別室で進め、学級での学習や生活に戻れることを想定し、つながりをもてるよう支援した。



○緩やかなつながり

・校内別室に来室できないときは、支援員が家庭訪問を実施し、当該児童の様子を確認するとともに、保護者とも面談をした。その際に、学習進度に応じた教科書、プリントを使い学習指導も行った。2学期からの登校への不安を少なくできるよう、夏休みに学校で支援員と宿題等に取り組むことを提案し、校内別室で過ごす機会を設けた。

成果

2学期は、保護者が付き添って登校することが1週間で終わり、校内別室を利用せず学級で過ごすようになった。時々、校内別室を利用することがあるが、短時間で気持ちを切り替えて教室に戻ることができている。

課題

今後も、学級担任と友達との関係を育めるよう、当該児童の気持ちに寄り添いながら励ましていく。